

デュルケームにおける知識社会学の問題*

小 関 藤 一 郎**

I

デュルケームに対する関心は1990年になってまた戻りかけたようである。デュルケームの遺稿をそろえて *Textes III vols* が刊行されたのは1970年であったが、この70年代に相次いでデュルケームに対する関心が高まり、S. Lukes の「デュルケーム」研究をはじめ、フランスをはじめ欧米諸国から多くの研究書が刊行されて、デュルケーム・ルネッサンスといわれたことがあったが、その後もこの傾向は続いている。わが国でも比較的比較的最近中島道男の「デュルケーム論」、山下雅之の「デュルケームとコントの間」などの好著が相次いで刊行された。筆者なども研究の第一線を退いてから10年以上もたつが、デュルケームのこうした趨勢に眼をうばれないわけにはいかない。それらの研究書について R. F. S. (1992年 n. 3) に (Francois-André Isambert) F.A. イザンベール¹⁾ がとりあげたようにまとめてとりあげることも必要であろうが、扱われた内容があらゆる点にわたっているから分量からみてもこの紀要でとりあげることは不可能である。90年代の著作は巻末にかかげるとして、筆者はそのうち 1993. Stephen Turner 編によって刊行された *Durkheim: Socio-*

*logigl and Moralist*²⁾ 中の W. S. F. Pickerling のとりあげた問題に関してデュルケームの知識社会学に対する問題の中心点を探ることとしたい。Pickerling はすでに1984年「デュルケームの宗教社会学」 *Durkheim's Sociology of Religion, Themes and Theories* を著わしているほか、デュルケームの宗教論集、やデュルケームの道徳、教育論集をすでに70年代に刊行し、現在は Oxford で「デュルケーム研究会」の責任者として世界のデュルケーム研究の第一人者である。ところでこの Pickerling の問題提起は何かというと S. F. Turner の編著の第二章「デュルケームにおける概念的思考の起源」³⁾ にとりあげられたもので要点は以下のようなものである。デュルケームの知識社会学とどうと普通それは年報 (*A. S.*) t VIにおいてモースとの共同執筆で書かれた“*De quelques formes primitives de la classification*”⁴⁾ と解されるもので、それはさらに発展させられて「宗教の原初形態」⁵⁾ の序文としてとりあげらようになったと見られているのである。つまり、それはデュルケームの知識社会学についての究極の見方であり、デュルケームも「分類の未開形態」の延長として「宗教生活」を見、また R. Hertz の「*La prééminence de la main droite*」⁶⁾ も分類の未開形態」の延長と見ているのである。しかしながら

*キーワード：Pickerling の問題提起、デュルケームの知識学、G. Namer の解釈

**関西学院大学名誉教授

1) R. F. S. は、*Revue française de sociologie* の略

2) この編著への寄稿者は H. F. Andrews, Philippe Besnard, Pauro Cori, Jean-Claude Filloux, F. A. Isambert, Hans Joas, Robert Alun Jones, Hans Peter Miiller, W. S. F. Pickerling, S. F. Turner, Paul Vogt 1993年である

3) 原題は “The origins of the conceptual thinking in Durkheim” である。pp. 52-70

4) 邦訳「分類の未開形態」(小関訳) 1990三版。以下この著をこのように略述して用いる。

5) 以下この著を「宗教生活」と略して用いる。

6) *Revue philosophique*, 68, 1909